秋田弁噺

いなかのばっぱのはなしっこ

佐藤　弘
（昭和40年機械科卒）

私の生まれ故郷旧仙北郡協和町中淀川地区(現大仙市協和)は国道13号線から山道を(2里)8kmも入った、小さい集落が県道(現在、国道341号線)沿いに点在する、静かな山間の農村地帯でした。私の実家があった部落は10軒の農家のある集落でした。隣近所もごく親しい関係でみんな顔なじみ、いろんな家へ遊びに行き、年をとって、もう農作業を引退したようなおばあさんたちには大変可愛がって貰いました。そんなおばあさんたちは、いつも子どもたちに不思議なお話をしてくれました。ノンフィクションか、フィクションか今でも良く分かりませんが、小学校に入る前のころを思い出して、それらのおばあさんたちのお話を再現してみます。

【その１、ホッケバンバ】

むがし、長十郎山のふもどさホッケバンバて呼ばえるバッパが掘立で小屋みでだちっちぇ小屋ここしゃで住んでえだど。ホントの名前だば誰も知らねぇし、年も百歳は超えでえだべたて、若ぇころだばたいした綺麗だ人だったど。このバッパだば狐こ使って色々な奇跡を起こす事ができるって言われてえだもんだど。ある日、村のおやだしゅう(金持)の喜右ェ門のじっちゃが急に腹痛ぇぐなってしまって、富山の薬こ飲んでみだども、なっても良ぐなんねがったど。「これだばなんもかもだめだ、誰が長十郎山さ行ってホッケバンバどごさ訳しゃべって、来てもらってけれ!!」というじっちゃの命令で、わがぜ(下男)の次郎が長十郎山さ行ってホッケバンバさ訳しゃべって「何とが来てけれ」て頼んだど。ホッケバンバは「わがった、すぐにえぐ」て返事して、喜右ェ門の家さ来てけだど。すぐにじっちゃのねどご(寝室)さ入ってえって、じっちゃの腹さ触って、なんだがわげのわがらねお経みでだごどしゃべってえだど。5分ぐれ経ったべが、ホッケバンバは「まんち、こえで大丈夫だべ、あど少したでば治る。」て言ったど。ホッケバンバ、お礼の米こど野菜こ貰って喜右ェ門の家がら出だば、じっちゃのねどごのねだした(床下)がらちっちぇ狐こ出できてホッケバンバど一緒に山さ戻ってえったけど。ホッケバンバど狐こが家がら出だば、すぐにじっちゃの腹痛はしっかり治ってしまったど。近所の人がだ、「ホッケバンバだばたいしたもんだ、おらも腹いでぐなったらホッケバンバさ頼んで治してもらうべ。」ど噂しあったど。んだども、へそ曲がりの太郎は、「なに、ホッケバンバだば、米っこねぐなれば、狐こをおやだしゅうの家さ行がせであんたごどやるもんでねえが。わりぃバッパだもんだ。」て言ったど。本当のこどだば誰もわがらね話だった。

《説明》

この話に登場する喜右ェ門のおじいさんも、若いころ喜右ェ門の家の下男だったという次郎さんも、私の子どものころ実在した人たちです。従って、どうもノンフィクションのような気がします。主人公のホッケバンバと呼ばれたおばあさんは私の子どものころにはもう亡くなっていましたが、その昔超能力を身につける修行でも重ねた人かも知れず、超能力を駆使して狐を操っていたのかも知れません。

【その2、狐のいたずら】

昔は日が落ぢればやるごどなっても無がったえて、男の人がだだば、誰がの家さ行って酒っこ飲むしか楽しみねがったもんだ。孫六のおどだば、金一の家さよばれで飲みに行ったど。しこたま酒こ飲んで、「さっさたいしたごっつぉうになったしな。ひぇばまじ家さけえる。」て言って良ぇ機嫌で畑のまんながの道あるって家さむがったど。したば、おなごの声で「おら家さ寄ってえてけれ。」て誘わえだど。そのおなごの家さ入ってえったば「まんち湯こさ入ってけれ。」て言われだもんで、湯こさ入ったど。、たいしたええ気持になってしまって歌こ唄ってえだど。孫六の嫁っこ、「おらえのおどだばなんとおせぇごと」て心配してえだども、あんまりおせぇがら提灯付けで金一の家まで迎えに向かったど。途中畑を通ったば、歌っこ唄う声きけだど。「なんだが聞いだごとある声だな」と思って、提灯で照らしてみだらなんと、孫六が肥え溜めさはって歌っこ唄ってえだど。嫁っこが「おど何してるどごだ」て聞いたば「おら湯っこさはってる。たいしたええ湯っこだ、かが、んがもはねが。」て言ったど。嫁っこは「おらだばさきたわぁえで湯こさはった。まじえぇ、おど家さけえるど。」といって家さ連れで帰ったど。家さ着いたば、孫六やっと正気に戻って「かが、おらだばなんとしたもんだべ、なしてこんたに臭せもんだ。」て言ったど。嫁っこが「あやしかだね、なんも覚えでえねべが、おめだば畑の肥溜めさ入って歌っこ唄ってえだけ。おが酔っっ払ってえだもんで、山の狐に騙されだもんねが。からだっこきれいに洗ってけらえて湯っこさ入れ!!」て言ったど。嫁っこに身体綺麗に洗ってもらって、臭ぇぐね着物着せでもらってがらも、孫六は「おらなんとしたごどだべ。金一の家がら出で、畑のどごさ来たば、わげぇおなごに声かげらえで、湯こさ入たえんた気するどもな!」てしゃべりながら寝だっけど。

《説明》

昭和20年代までは狐にばかされたという話がよくありました。盛り場など有るはずのない大田舎のことゆえ、男たちの夜の楽しみは、どこかの家に集まってお酒を飲むことしかありませんでした。その帰り道で、本編のように女に誘われて肥え溜に入ってしまったとか、冬、女に誘われて、ついて行ったら吹きだまりに落っこちてしまったりしたという話はよく聞きました。でも、狐が人間に悪さをするような妖力を身につけているはずはありません。司馬遼太郎さんのエッセー集「歴史と風土」に怨霊とものの怪に関するくだりがありました。それによると、その昔照明器具など殆ど無い時代には、夜は一寸先も見えないような暗闇になり、日本中にものの怪が跳梁していて、人間にいたずらをしたものだそうです。現代は真の真っ暗闇というのは殆ど存在しないため、ものの怪は住む場所を失い、行者が修行するような山奥にしか住まなくなったそうです。私の田舎はそのころ街灯などは全くなく、民家もみんな早寝でしたので毎晩真暗闇でした。昔、私の母は夜むずかってなかなか寝ない孫たちに「言うごど聞がねば、もんけ(ものの怪)来て連れでえがれるど、はやぐ寝れ!!」と言っていました。思うに、いたずら好きなものの怪がいて、「あんまり飲み過ぎるなよ。」と諭してくれていたのかもしれません。